

【論 説】

中間理論としての類型論

山 口 重 克

目 次

§ はじめに

§ 1. 原理論と中間理論

§ 2. 純化・不純化論の棄却と変容の動力の没却

§ 3. ブラック・ボックスの中身

§ 4. ブラック・ボックスの埋め方

§ はじめに

私は以前に「段階論の理論的必然性—原理論におけるいくつかのブラック・ボックス—」（山口重克編著『市場システムの理論—市場と非市場』御茶の水書房，1992年，所収）という論考において，宇野理論におけるいわゆる段階論の方法とその意義に対して一つの問題を提起した。その意図は，上掲の拙稿のタイトルからもある程度うかがえるかと思うが，現実のいわば混合的，合成的資本主義経済の分析基準としての経済理論が，原理論ないし基礎理論と段階論ないし中間理論との二層構造にならざるをえない点を示し，その必然性を原理論の理論的限界が段階論を要請するという観点から説明しようということにあった。従来の段階論は，単に資本主義の歴史を何らかの基準によって区切ってみせたものでしかないという面が強く，理論的な問題としては，その基準は何に求めるべきかという点が最大の関心事であって，原理論との関係がよくわからなかった。そこで，分析基準としては原理論だけでは不十分であるため，段階論がこの原理論の限界から要請されているものと捉えることによって，原

中間理論としての類型論（山口）

理論との内面的関連を示し、そのことを通して段階論の理論としての性格を明確にしたかったのである。

もっとも、これはとりあえずの問題提起ないし試論であり、同学の士の検討をまって内容を詰めていきたいと考えて提出したものであったが、7年たった最近になって漸く本格的な検討に接することが出来た。小幡道昭「原理論における外的条件の処理方法—山口重克〈段階論の理論的必然性〉によせて—」（東京大学『経済学論集』第65巻第2号，1999年）がそれである。

小幡論文は、大別して二つの部分から成っている。一つは、私が提起した類型論ないし中間理論という領域の理論的性格に対する一般的疑問を提示している部分であり、もう一つは、私が原理論では、原理論外的諸条件はいくつかのブラック・ボックスに入れられて不問に付され、原理論の外で段階論ないし類型論を構成する際の基本的な要因になると論じた点をめぐる問題を提起している部分である。本稿ではこの前半部分だけを検討することにし、後半部分は続稿「外的諸条件の構造と諸類型の構造」において検討することにした。なお、以下での小幡論文からの引用の出所については上掲誌の頁数だけを示す。

§ 1. 原理論と中間理論

小幡はまず、この論文の第1節「〈原理論の限界〉に関する一般的考察」の第1項「1.1 原理論と中間理論との関係」というところで、次の2点について一般的疑問を提出する。

第1点は、私の論考では「それ〔中間理論〕がいかなる意味で理論たりうるのか、それを理論たらしめる独自の展開方法とは何か、こうした中間理論に対する積極的な基礎づけがここではほとんど与えられていない」（p. 38. 1）という点である。あるいは、「原理論が現状分析の用具としてはなお不十分であるという限界が示されれば、原理論という理論からの要請であるがゆえに、その要請に応える段階論もまたやはり理論たるべきだということになるのかどうか、この点がはっきりしない」（同上）といい、結局の所、私のいわゆる中間

理論なるものも、私が批判している「具体的な歴史をある基準によって段階的に区切ってみせ」ただけの段階論と「内容上大差はないのではないと思われる」（p. 38. r）という。

第2点としては、「ここでの説明では原理論と段階論とが現状の分析用具としてどういう関係にたつのかもまた明らかでない。両者は現状分析のための用具として、併存して利用される関係を想定しているのか、あるいは、原理論はいったん段階論というかたちをとって間接的に現状分析に役立つと考えているのか、という点が疑問として残る」、「原理論は分析用具として直接に現実に適用してよいが、ただそれだけでは不十分であるというのか、そもそもそうしたかたちで原理論を直接適用することに無理があるのであり、段階論の展開を媒介としてはじめて現状分析に適用すべきであるというのか、この点が明確ではないように思われる」、（同上）といった問題が提出される。そして「従来どちらかという、原理論は直接に現実に適用すべきものではなく、あくまでも段階論を構築するための基準ないし手段とみなされてきたきらいがあるが、山口氏の議論はその点でいうと、原理論そのものもやはり〈分析用具〉であるという主張を強めているように思われる。そうであれば、原理論はそれ自身独立に分析用具として適用されるとともに、それでは分析できない残余部分を分類整理する用具として段階論というものが並行して必要となるということになるであろう。もしそうでないとすれば、段階論は原理論と別個なものとして分析用具を構成するのではなく、原理論は段階論のというすがたにいちど転換され、特定の構造と運動様式を具えた一つの経済社会像を介して現状分析の用具となるということになろう」（同上）というのである。

以上の2点についての疑問に対する答えは、この小幡の疑問の内容をもう少し明確にした上で、したがって小幡論文全体を検討していく過程で、あるいは検討したあとで、行う方がよいのであろうが、読者の便宜のため、あらかじめここで、この二つの問題に対する私の考え方をごく簡単に述べておくことにしよう。

まず第1の問題であるが、私はもちろん、歴史を何らかの基準によって区切

中間理論としての類型論（山口）

れば理論になると考えているわけではない。小幡によれば、私の考えている理論は歴史と「内容上大差はない」ものになるようであるが、私はもちろん大差があるものとして考えている。そこで、ここでとりあえず、段階論ないし類型論が「理論」であるための資格・要件について私がどのように考えているかをあらかじめごく簡単に述べておくことにする。

理論の要件は、段階論に限らず、一般的に言って、最低限、次の二つではないかと思っている。すなわち、一つは、現実から帰納したものであること。いいかえれば、現実そのものではなく、抽象的なものであること。第二は、繰り返しの要因を説明しているものであること。いいかえれば、ある期間持続する現象であることが説明されていること。そして段階論も、とりあえずこの2点を充足していれば、理論である最低限の条件は具えているといつてよいのではないかと考えている。

この問題については以前に次のように述べたことがある。たとえば、「理論的分析とはどういうことか…。理論とは繰り返す事実を対象にしてそこに貫いている法則性をとり出したものであるといつてよいであろう。ところが歴史的事実は、厳密には一回限りの個性的な事象であるといわなければならない。したがって歴史的事実を理論的に理解しようとすることは、厳密には不可能なものとといわなければならない。しかし、歴史的事実の中にもし繰り返していると考えられる部分ないし側面があるならば、それをとり出して理論として構成し、現実をそのような繰り返す部分ないし側面と繰り返さない個性的な部分ないし側面との合成物として再構成することが可能になろう。これが歴史的事実の理論的分析ということの意味である」（山口『価値論・方法論の諸問題』御茶の水書房、1996年、p. 207～8）、あるいは、「ある期間にわたって持続しているということは、いいかえれば、その期間いわば繰り返し作動しているということであり、その限りでは、純粹の市場経済的要因のようにではないけれども、半ば法則的な力がそこに働いていると捉えることができる、つまり期間を限った理論を作ることができるわけである。この種の要因としては、たとえば地理的環境、人間の価値観・宗教観・民族性・社会規範といった文化的環境、生産

技術の水準・構造，国家の政策，等々が考えられる」（同上，p. 146～7）と。

これらの諸要因は、いずれも一定の期間人間の行動を拘束するものであるが、これらを仮に便宜的に一括して制度ないし慣習というような言い方で呼ぶことにし、これがある段階のある国民経済なりある地域の経済なりの特殊性、したがって資本主義生産の様々な多様性、を規定する基本的要因であると見るとして、それではこれらの要因にはどうして持続性があるのかということになると、この問題については残念ながら今のところは、これらには何か慣性ないし粘着性のようなものがあるとしかいいようがないのではないかと考えている。「人はなぜ習慣的に行動するのか」（塩沢由典『複雑さの帰結』）という問題は、いろいろな推論はありうるが、まだ十分解明できているとはいえない。いいかえれば、これらの要因の持続性はとりあえずは経験的な事実として前提するしかないのである。したがって、この問題についても理論的な説明が出来なければ、段階論は理論とはいえないということであれば、今の人間行動論なり社会学なりの段階では、段階論ないし類型論は所詮、帰納的な歴史反映的パターン認識論でしかないといわれても、それはそれでやむをえないというほかないであろう。なお、上で述べた二つの要件はもちろん必要条件であって、十分条件については別に論じなければならない。

第2の小幡の問題は、つづめて言ってしまえば、原理論と段階論とは分離可能か不可能かという問題のようであるが、これは実はこのように簡単に二分法的に提示しきれない、なかなか面倒な問題であって、論じなければならない問題は多岐にわたる。小幡は、「この点はやがて詳しく論じる」が、「実はこの点に疑問の一つの中心がある」といい、つづけて「やがて論じるように私〔小幡〕自身はこの分離可能性を否定し、その意味で原理論と段階論との区別そのものも統合的に再構成するべきではないかと考えている」（p. 39. 1）といっているので、これも詳しくは小幡による私見の検討の過程で、あるいは検討のあとで論じることにして、ここではとりあえず上で引用した小幡の疑問の部分に限ってごく簡単に私の考えを述べておく。

現実の資本主義は純粹に市場経済的な関係だけで運営されて存続しているも

のではない。それに対して、純粹資本主義論としての経済学の原理論は、いくつかの仮定を置くことによって、資本主義市場経済をあたかも自立しうる経済システムであるかのように展開してみせている理論的構築物であると私は考えており、その点で、現実の資本主義の分析用具としては、小幡の言い方を借りれば、そのままでは「直接に現実に応用することには無理がある」ものであり、なんらかの補足が必要な分析用具であると考えている。その意味では、これまた小幡の言い方を借りれば、原理論は「あくまでも段階論を構築するための基準ないし手段」と考えているのである。ところが、このような私の考え方について、小幡は、私のどの発言をとって言っているのか不明であるが、「山口氏の議論はその点でいうと、原理論そのものもやはり〈分析用具〉であるという主張を強めているように思われる」という。この言い方の限りでの小幡の推量に対していうならば、私は、原理論そのものもやはり分析用具であるとは思っているのであるが、つづいて小幡がいうように、「そうであれば、原理論はそれ自身独立に分析用具として適用されるとともに、それでは分析できない残余部分を分類整理する用具として段階論というものが並行して必要となるということになる」といわれると、これは私が考えていることと違う。したがって、「そうでない」わけであるが、つづいて、「もしそうでないとすれば、段階論は原理論とは別個なものとして分析用具を構成するのではなく、原理論は段階論というすがたにいちど転換され、特定の構造と運動様式を具えた一つの経済社会像を介して現状分析の用具となるということになろう」といわれると、これまた私の考えていることとは違う。

小幡は分析用具としての理論は統合されて、一つになるべきだという説のようであるが、私は分析用具は二つあるべきだと考えている。その意味で、併存説であると言ってもよいが、小幡の言う意味での並行説、つまり「原理論はそれ自身独立に分析用具として適用される」と考えているわけではない。しかし、だからといって原理論は、段階論を構成するたんなる媒体の役割を果たすものとして、段階論が出来たあかつきには、それにいわば合体されて、消え去るべきだという小幡の議論は私には旨く理解できない。これはおそらく、原理論に

ついでに理解そのもの、および段階論（私について言えば類型論）についての理解そのものに相違があることからくる問題なのであると思われる。たとえば、小幡においては段階論はある段階について一つだけあるようなものとして考えられている、いいかえれば、その段階の独自性を規定するすべての要因、あるいは基本的なものと考えられるいくつかの要因、によって説明されたいわば完結した「一つの経済社会像」を示しているべきものという理解が背後にあるのではないか。つまり、理論は、タテには（段階の相違に応じて）複数あってもよいが、ヨコには（一つの段階のなかでは）一つしかあってはならない、単一のシステムとして、「一つの経済社会像」のいわば一義性が体系的に示されていなければ「理論」の要件を欠いている、という考え方があるのではないか。

しかし、もしそうだとすると、これは私の中間理論の考え方とは異なるものである。私としては、ある一つの段階についても、制度等のあり方の相違によって複数の類型がありうることを示しておくことによって、多様なシステムが併存しうることを積極的に示すべきであると考えている。そうすることが、多様な現状の分析にとって有用であろうと思われるし、また純粹の市場経済と人間社会とのさまざまな摩擦のありようは、一つの経済社会のモデルで統一的に示すことは困難なのではないかと考えられるからである。そして、ある段階について複数の経済社会像が構成されるべきだとすれば、当然それらの比較対照の基準としての原理論が独立に構成されていることが必要となるであろう。なお、中間理論についてこのように考えているということは、段階というタテの類型を規定する基準と制度等によるヨコの類型化を規定する要因とを異質のものとして区別して考えており、一つの段階のなかでヨコの諸類型の複数の組み合わせがありうるということ、いいかえれば段階という区切りは、たとえば生産力水準とか基軸産業とか世界編成の基本構造といったような大まかな基準によって便宜的に行っておくほかないと考えているということの意味する。これは、ヨコの類型を規定する諸要因の持続期間が必ずしも一様ではないということから要請されてくる問題でもあるが、立ち入っては次稿で考察することにし

たい。

小幡の一般的疑問の第2点目の、原理論と段階論は分離可能か否かをめぐる問題は当面はこの程度で打ち切り、後にブラック・ボックスの中身と埋め方の問題を検討する際と次稿で小幡論文の第2節を検討する際に改めて論じることにして、第1節の次の問題に移ることにしよう。

§ 2. 純化・不純化論の棄却と変容の動力の没却

小幡はつづいて、第1節「〈原理論の限界〉に関する一般的考察」の第2項「1.2 原理論の限界の一般的意味」において、私が提起したブラック・ボックスという考え方を検討するのであるが、それに先立ち、まず、「注意すべき点」として、純粹資本主義の措定の際に従来考えられていた「純粹化という概念は、少なくとも宇野氏の展開においては一定の傾向として時間の流れのもとで捉えられてきた点が、山口氏の場合には著しく後退している点である。すなわち、純粹化に対して一般にそれがある時点で逆転し、不純化が進行するようになったといった説明には必ずしもなっていないのである。山口氏はおそらく意識的にこのような純粹化傾向とその逆転という問題構成をはずしている節がある」（p. 39. 1）といい、ここまでは「同感するところが多い」としたうえで、「注意すべきは、純粹化とその逆転という問題構成を棄却することは、資本主義経済の変化の動力を理論的に追求することをやめることと同義ではないという点である」といって、次のように議論を進めている。すなわち、「資本主義経済の変化が実際には純粹化とその逆転という簡単な関係に還元できないとしても、しかしそうした時間の流れの中で観察される構造上の変容を惹起する基本的な機制を抽象化し一般化することは可能かもしれない。変容の具体的内容は多様かもしれないが、変容を生み出す動力の方は単純化して捉えることができるかもしれないのである。山口氏の議論は、単純な純化・不純化論の棄却とともに、変容の動力に対する理論的追求をいっしょに没却してしまったのではないか。その結果、多様性ないし変容に対して、段階論は〈類型論のようなも

の〉…であり、その有用性を消極的な意味では認めている従来の歴史反映論的な〈パターン認識〉の用具としての物尺的段階論のイメージが払拭されずに残ることになっているように思われるのである。これに対する私見は後に述べるとし、ここではこうした副作用が従来の段階論への回帰という問題点となって山口氏の議論のうちに潜んでいる点を確認しておきたい」（同上、1～r）と。

「従来の段階論への回帰」がどの点で「確認」されたのか、上の文章だけでは分からないが、「これに対する私見は後に述べる」とされているので、私の意見もその時に述べることにして、ここでは簡単に以上の小幡の問題提起そのものに対する若干の感想だけ述べておきたい。

小幡がここで「資本主義経済の変化」を「純粋化とその逆転という簡単な関係に還元」することをどう評価しているのか必ずしも定かでないが、「そうした時間の流れのなかで観察される構造上の変容を惹起する基本的な機制を抽象化し一般化することは可能かもしれない。変容の具体的内容は多様かもしれないが、変容を生み出す動力のほうは単純化して捉えることができるかもしれないのである」といい、「山口氏の議論は、単純な純化・不純化論の棄却とともに、変容の動力に対する理論的追求をいっしょに没却してしまったのではないか」（同上）といっているところを見ると、純化・不純化論を保持していると変容の動力が解明でき、棄却すると追求できなくなる、と考えているようにもみえる。

私は、小幡の言う通り、純化・不純化という問題構成を「はずしている」といっていいが、それは資本主義経済の変化をこういう簡単な関係に還元できるかどうか疑問があるからでは必ずしもない。「はずしている」のは、純粋資本主義論措定の要請論にとっても、措定の手続き論にとっても、資本主義経済の変容の過程で、かつてあるところに純粋化の傾向が存在したかどうかという論点は関係がないと考えているからである。純粋資本主義論措定の必要の理由は、現実の資本主義が不純かつ多様であり、しかもやがていつか純粋に向かって収斂し、一様化するというようなものでもないということと、他面で、現在においても純粋化の圧力は日々いたるところで作用しているということを確認

するだけで十分だと考えているのである*。

* 宇野はおそらくマルクス経済学としては純粋なモデルにもいわば唯物論的な根拠がなければならないと考えて純粋化傾向を強調したのであろうし、いわゆる世界資本主義論者は、存在しない純粋化傾向では唯物論的論拠にならないとしていわゆる内面化による純粋モデルの設定を主張をしたのであろうと思われるが、私からみれば、いずれの設定論拠によるものにせよ、原理論の世界は思惟による理論的構成物であることには変わりはない。

また、他方、純粋モデルが思惟による理論的構成物であるといっても、それは必ずしも単なる観念論的構築物というわけではない。あくまでも現実を対象とし、一定の目的をもって現実から帰納・抽象したものであって、もしそう呼ぶことを好むのであれば、それは唯物論的構築物なのである。というより、思惟というものはそもそも唯物論的である以外にありようがないのである。

これに対して小幡は、「山口氏の議論は、単純な純化・不純化論の棄却とともに、変容の動力に対する理論的追求をいっしょに没却してしまった」という。小幡自身いっているように、この純化・不純化という「問題構成を棄却することは、資本主義経済の変化の動力を理論的に追求することをやめることと同義ではない」のであるから、この小幡の批評は私には理解し難い。「変容の動力」というのがどういうことを意味しているのか、純化・不純化論を保持しているとそれがどのように追求できるのか、がここの限りではよく分からないので、何とも反論し難いが、小幡が、たとえば「時間の流れ」を問題にすることによって、生産力の変化を「変容の動力」として原理論の中に取り入れようとしているのだとしたら、この原理論の考え方は私の考え方とは異なる。私の原理論では生産力の具体的な水準ないしその変化が資本主義経済の構造ないしその変容に与える影響の問題はブラック・ボックスに入れられており、生産力の水準とその変化はいわば抽象的に想定されているにすぎない。

ただ、私が考えている原理論の展開においても、たとえば、その分化・発生論的論理の展開は、変容の動力なり過程なりについてのある程度の示唆を与えることが出来る面を持っているのではないかと考えている*。小幡は、あるい

は変容の動力なるものをいわば非市場との対抗関係の中で形成されるものだと考えているのかもしれない。そしてその点でいえば、私も実はそのように考えているのであるが、しかし、そのように考えるとしても、それでは、その点が原理論の展開にどのように反映され、その動力を原理論の内部でどのように理論的に追求できるのかということになると、私にはよく分からないというしかないのである。

- * この問題に関連して、以前に私が述べたことを以下に引用しておくことにする。

「競争論的な発生論の方法は、同時的に並存している諸資本なり諸機構なり…の間に論理的な序列をつけ、それらの機構的関連をいわば立体的に解明しようとするものであるとあってよいが、それではこのような立体的な解明はどのような理論的利点をもつものと考えられるであろうか。それは、…産業資本と銀行資本の間関係、あるいは銀行組織なり貨幣市場なりの中の諸機構間の関係に生じる構造的な変化、発展を分析しようとするさいに有効な分析基準としての意味をもつことになるという点にあるのではないかと考えられる。…発生論的に構成された構造論にあつては、構造変化そのもののメカニズムを分析でき、したがってまたさらには、将来の変化の方向の予測とか、あるいは意図的に変化を作り出そうとする場合の結果の予測なども可能な用具としての利点をもつものといえるのではないかと思われる」（『資本論の読み方』有斐閣、1983年、p. 19～20）。

「[市場]機構の特殊性を分析するための原理的な機構論を考えた場合、…段階規定とか構造変化とか、あるいは変化の将来の予測などに、それを分析用具として有効たらしめようとする場合には、単なる共時的な機構論よりも、発生論的に構成された機構論の方がより有効であろうと考えているわけです。…たとえば金融構造の問題でいいますと、イギリスの特殊な分業構造とか、ドイツの特殊な兼業構造を分析するとか、あるいは分業化した機構がある時点になると、統合されて兼業化するといったような構造変化の問題を分析する場合に、機構間の立体的・有機的な関係が明らかになっていなければ、その特殊性なり構造変化なりがどういう意味をもつのか、ある機構がなくなるときには何を動力にしてなくなるのか、あるいは政策的にある機構を取りはらったときには、どういう問題が生ずるのかといったことは、分析ないし予想が出来ないのではないか、といったことを考えているのです」（佐伯尚美他編『マルクス経済学の現代的課題』東京大学出版会、1981年p. 45～47）。

中間理論としての類型論（山口）

なお、ここの後者の引用文は「マルクス経済学の現代的課題」と題するコンファランスでの発言であるが、この私の発言に対して、参加者の柴垣和夫、竹内啓、大内力らから次のようなコメントがあったことも、この問題を考える上での参考として、以下に紹介しておこう。

（柴垣）「[現実の資本主義の] 変化なり違いなりが、何を動力にして生まれるかという点で、その場合の要因を説明するのに、山口さんは発生論的な論理構成が有効だと考えられているように読んだのですが、むしろそういう運動なり構造の違いが現実に出てくるのは、原論外的な要因によって動力が与えられるというふうに考えるべきではないか」（同上書，p. 47）。

（竹内）「論理そのものの展開が、…十分歴史的な展開を把握できるのかどうか。…たとえば生産力の発展を資本主義の経済論理が取りこんで資本主義の発展が行われるわけですが、…生産力の発展ということは除いて、それを全く外的なものとして考えてしまっているのだろうか」（同上書，p. 47～48）。

（大内）「僕は宇野先生が、段階論なり現状分析をやるときは原理論を忘れろ、といわれたことを重要な真理だと思っているのです。すなわち、原理論は、いわばポジティブには現状分析なり段階論の基準には使えないのであって、ネガティブにしか使えない。ネガティブというのはいうまでもなくチェック要因としてしか使えないといういみです…。山口君の議論は、原理論は積極的な分析基準だというふうに、少し強くいいすぎた」（同上書，p. 50～51）。

本文でも述べたように、私としては、様々な制度的要因によって、あるいは生産力の水準によって資本主義の多様な様相が形成されると考えているわけであるから、いいかえれば、私も柴垣や竹内のいうように「原論外的な要因」、ないし非市場的要因によって多様性とその変容の動力が与えられるというように考えているといってもよいだろう。

しかも、小幡は続けて純化・不純化という問題構成を棄却し、変容の動力に対する理論的追求を没却してしまっていることの結果として、私の類型論には「従来の歴史反映論的な〈パターン認識〉の用具としての物尺的段階論のイメージが払拭されずに残る」ことになっており、「こうした副作用が従来の段階論への回帰という問題点」となって潜むことになっているという。物尺的段階論というのがどういう段階論なのか、ここではよく分からないし、純化・不純化という問題構成を棄却すると、まわりまわって従来の段階論に回帰する結果となるという点もよく分からない。また、小幡は「歴史反映的なパターン認識の用具」なるものを消極的にしか評価していないようであるがであるが、私は

この用具の有用性を「消極的な意味で」しか認めていないのではない。私が問題にしたのは、「この限りでは、段階論は現状分析にとっていわば便宜的に要請されるものとして意義づけられるにとどまり、必ずしも独立の理論分野としての必然性が明らかではないといわなければならない。少なくとも方法の問題としては、原理論と段階論の必然的な理論的補足関係を積極的に明らかにする必要があると考えられる」（前掲拙著，p. 4）という点であった。念のために付言すれば、段階論ないし類型論が便宜的に要請されるものであるという点も、また歴史反映論的な側面を残しているという点も、消極的にしか評価していないわけではない。そのようなものとして意義づけられるに「とどまっている」点、つまり具体的には、原理論との関連がつけられていない点を問題にしたにすぎないのである。原理論との関連を付ければ、それだけで段階論ないし類型論は理論といえるのかと聞かれれば、もちろんそうはいえないと答えるしかないが、まずは関連を付けることから始めなければ、原理論は何のためにあるのかが分からなくなる。私の関心はまずは原理論の役割を明らかにすることにあつたのであり、その問題については一応の考え方を示したつもりである。もっとも、この限りでは、原理論とのいわば消極的な関連を示したにすぎないので、次稿でもう少し積極的な関連の付け方を考究したいと考えている。

§ 3. ブラック・ボックスの中身

さて、以上のように注意すべき点を確認したあと、小幡は、私が提起したブラック・ボックスという概念の検討に移る。

私が原理論におけるブラック・ボックスという考え方を提起したのは次のような文脈においてであった。

「純粋資本主義論には、現実には一元的な純粋化が実現できなかった市場経済というシステムの限界が何らかの形で反映されているはずである。…それでは、社会的生産を市場経済的な原理だけで自立的に編成することの無理は、具体的には原理論の中にどのように反映されているのか。それは純粋資本主義を

中間理論としての類型論（山口）

あたかも自立するかのごとくに説くために、いくつかの問題をいわばブラック・ボックスに入れている点に反映されているといえることができる」（前掲拙著 p. 4～5）。

そして、つづけて、少々長い引用になって恐縮であるが、次のように述べたのであった。

「原理論の対象としての純粋資本主義社会は、その構成員が経済人的行動だけを行うことによって私的に個々の生産と流通を遂行し、その意図せざる結果として社会的生産を編成していると想定されている社会である。このようにすべての構成員が、他の行動原則を介在させないで、市場経済的な行動原則だけに従って行動することをおして社会的生産を編成して社会のことを、市場経済が一元的に、あるいは自立的に、社会的生産を編成している社会と呼ぶことにする。原理論が対象にするのはこのような社会であるが、しかし、実は原理論においても、明示的にはないが、構成員について必ずしも経済人的とはいえない行動を予定せざるをえない場合があるのである。ただ原理論では、それは立ち入った考察を行われぬままブラック・ボックスに入れられ、ごく消極的に扱われることによって、その対象が自立しているかのごとくに説くのである。ブラック・ボックスを開けて、不問に付されていた部分を埋めることになると、不問に付されていた問題の性質によって、埋め方は一義的ではなく、いろいろなケースがありうることになる。…それぞれの問題はそれらが発生する際の条件によって埋め方にいろいろなケースがありうるものであり、埋め方の相違によって、社会的生産の編成の仕方にそれに応じたいろいろなケースがありうることを示されることになる。中間理論としての段階論というのは、このいろいろなケースを整理し、類型化して示したもののことである」（同上書、p. 5）と。

この私の文章のうちの「実は原理論においても」以下の文章を引用しながら小幡は、これもまた微妙な点があるので長い引用になって恐縮であるが、次のようにいう。

「ここではブラック・ボックスに入れられる中身は、かなり限定されている

といってよい。すなわち原理論の構成員の市場経済的でない行動原理に対象は絞られているかのようにみえる。しかし、実際には後にみてゆくように、ブラック・ボックスに入れられているのは、必ずしも行動原理だけではないのである。／この点をどう考えるかは具体的内容を検討するなかで論じてゆくが、ここでは可能性として、逆に次のように考えてみる余地も残されている点を指摘しておこう。すなわち、原理論の自立性を支える隠れた条件は、必ずしもここでいう市場経済的でない行動原理ではなく、行動原理としては一元的であっても、それが異質な外的条件を取り込みながらその行動原理を特定の型に変形して現実化するというように考えることもできる。これにたいして原理論を支える行動原理が商品経済的なものとそうでないものと実は複数あるというのは、さきに見た混合資本主義という認識や、類型論という規定の仕方とともに、原理論と段階論とをそれぞれ異なる用具として併用するという山口氏の基本姿勢に深く根ざしてるのであろう」（p.40.l～r）と。

ここで小幡は、ブラック・ボックスの中身の問題の考察に入っていく、まず「中身はかなり限定されている」、「構成員の市場経済的でない行動原理に対象は絞られている」、しかし中身は「実際には…必ずしも行動原理だけではない」と私の文章にコメントを加えているわけである。私が中身として考えていることは、小幡のいう通り、「経済人的とはいえない行動」だけではない。したがって、私がそこで「原理論においても…必ずしも経済人的とはいえない行動を予定せざるをえない場合がある」といったのは、私としては中身の一例を示しただけのつもりであり、それに対象を絞ったつもりではなかったが、いま読み返してみると、やや不用意な書き方をしていることは否めないかもしれないと思う。

しかし、小幡が続けて、「ここでは可能性として、逆に…原理論の自立性を支える隠れた条件は、必ずしもここでいう市場経済的でない行動原理ではなく、行動原理としては一元的であっても、それが異質な外的条件を取り込みながらその行動原理を特定の型に変形して現実化するというように考えることもできる」といっている中身の理解には疑問を禁じ得ない。上述のように、私はそれ

を市場経済的でない行動原理に絞り込んでいるわけではない。いいかえれば私も、不問に付されている、あるいは隠されている中身については、「行動原理としては一元的であっても、それが異質な外的条件を取り込みながらその行動原理を特定の型に変形して現実化」したものも含まれていると考えているわけであるが、このような中身は、原理論の対象である純粋資本主義をいわば不純化する要因であると考えているのであり、小幡のようにその純粋性を支える条件であるとは考えていない。ここでの限りでは小幡が「原理論の自立性を支える隠れた条件」といつているものがどのように考えられているものなのかよく分からないが、ブラック・ボックスの中身のことをこのように表現しているのであろうことはほぼ間違いないであろう。後にも述べるように、この点が私の考え方との決定的な相違点である。

* ここで、上掲の私の文章において私が述べたかったことを念のために箇条書きにして整理しておこう。

①原理論の世界は構成員の経済人的行動だけによって編成されている。この市場経済的原則だけによって編成されているということが一元的とか自立的とか純粋ということの意味である。いいかえれば、原理論の自立性を支える条件は経済人的行動であって、これは隠されていない。

②原理論の世界でも構成員について必ずしも経済人的とはいえない行動が予定されている場合がある。しかしこれについては立ち入らないで、単純な仮定をおくだけで、あとはブラック・ボックスに入れる。小幡流に言えば、隠しておく。こうして原理論の世界の一元性・自立性・純粋性を維持する。なお、必ずしも経済人的とはいえないものをブラック・ボックスに入れるというのは、全く市場経済的でないものだけを入れるということを必ずしも意味しない。合成的、混合的なものを入れるということも含んでいる。また私の場合、隠されているということは、それが純粋資本主義の自立性の隠れた条件であるということの意味しない。

③次いで、必ずしも経済人的とはいえない行動が立ち入って考察される。つまりブラック・ボックスを開けて、そこに隠しておいた問題を取りだし、一元的でない、自立的でない、したがって純粋でない市場経済の類型的考察に移ることになる。小幡の場合は、ブラック・ボックスの中身は「原理論の自立性を支える隠れた条件」であるから、これを隠しておかないで出してきた場合の市場経済論も原理論であることにはかわりはないということになるのかもしれない

が、私の場合は、これはもちろん原理論ではない。

また小幡は、この「可能性として」考えられる点を述べた後、「これにたいして原理論を支える行動原理が、商品経済的なものとそうでないものと実は複数あるというのは…原理論と段階論とをそれぞれ異なる用具として併用するという山口氏の基本姿勢に深く根ざしてるのであろう」といっているが、ここで述べられていることの意味もよく分からない。ここで「これにたいして」といっているところからみると、その上の小幡説に対置して述べられていると考えられるから、これは私の説のことをいっている文章であろうと読めるが、そうであるとする、私の中身が商品経済的でないものに絞られているといっていた小幡の先の解釈に抵触するであろう。もちろん、私自身は絞っているわけではないのであるから、それはそれでよいのであるが、ブラック・ボックスに入れられる行動様式が複数あるというのは、「原理論を支える行動原理が複数ある」という意味でいっているのではないし、この複数あるというのは併用説に根ざす考え方だというが、小幡が「隠れた条件」を「異質な外的条件を取り込みながらその行動原理を特定の型に変形して現実化」したものというように、いわば二分法で考えていることと、私の「併用」説ないし合成説とがどう違うのかも、ここの限りではよく分からない。

さらに、最後の所の「原理論と段階論とをそれぞれ異なる用具として併用する」というのが私の「基本姿勢」であるといっている点であるが、この小幡の解釈については、先にもその意味ないし根拠がよく分からないことを述べた。しかし、おそらくこの論点がこの小幡の論考全体の最も中心的な論点であるようだから、拙稿でも、小幡の論考の後半を検討する続稿を含めて、全体としてこの論点についての私の考え方をいずれ整理して述べなければならないであろうが、前半だけを取りあげているこの本稿でもとりあえず、つづいて小幡が提示している私に対するいくつかの疑問に対して簡単な感想を述べることによって、私の考え方の一端をあらかじめ示しておきたい。

小幡は上の文章につづけて、次のような例を挙げて問題を開示している。す

なわち、

「原理論を構成する主体の行動原理は基本的には私的な利得追求しかないとしても、たとえば労働者の場合、その行動原理にもとづく行動様式は、技能がどの程度標準化しているかとか、労働組織がどのように編成されているかとか、家族や地域の構成員とどのような社会関係を形成しているか、などの諸条件によって変形して現れることになろう。あるいは土地所有者に関しても、借地期間がどのように定まるかとか、土地の等級差がどの程度分散しているかとか、いくつかの条件によって単純な原理にもとづく行動でありながらその発現様式が変化すると考えることもできる。そこには食欲という単純な欲求も、生の肉にかじりつくというかたちで直接満たされるのではなく、人間社会ではさまざまな食事の様式を生みだしそのなかではじめて充足されてゆくのと似た関係があるといえよう」(p. 40. r)。

小幡はここで、①一元的な行動原理に「取り込」まれてそれを「特定の型に変形して現実化する」「異質な外的条件」の例として、労働者については、技能や労働組織や家族・隣人などとの社会関係などの「諸条件」をあげ、土地所有者については、借地期間の決まり方や土地の等級差の分散の仕方などをあげているわけである。②そしてこの一元的な行動原理と行動の特定の型との関係を、食欲と様々な食事の様式との関係との類比で論じている。

②についての感想から述べるならば、私は、ここの類比の例でいえば、食欲の充足を原理論での一元的な行動原理にあたると考えていることになる。現実の人間生活では、この充足は、たとえばそれぞれの民族や家族の文化や慣習によって、様々な様式で行われるわけであり、様式によってはたとえば断食などで一時的に食欲が満たされないというようなこともあるわけであるが、この多様性の問題はブラック・ボックスに入れておき、原理論では、たとえば「生の肉にかじりつく」という単純な様式を仮定しておいて、人間生活の原理を考察する、というような類比がとっさの感想として思い浮かんだことである。

①の問題についていえば、私は、原理論では必ずしも経済人的でない行動が予定されている場合もあるし、また従来の原理論では経済人的な行動でも原理

論のなかで取り扱われていない場合もあることを問題にして、何が扱われるべきであり、何が扱われるべきでないか、扱われるべきでない問題があるとしたら、それはどこでどう扱われるべきか、といったことを考究してみたわけであるが、その場合私にも、労働者や土地所有者について考えていた問題があるにはあった。

それは、労働者については、たとえば経済人的行動原理から出来るだけ多い賃金を求めるにしても、そのために労働組合を作って団体交渉をしたりストライキをするといったことや、チームを作って作業を行っている場合、チーム全体の成績を上げることが自分の収入を増加させるといった条件があれば、チームの他のメンバーの作業の遅れをカバーしてやるといった相互扶助的な行動が行われるといったことがあるであろうが、それはブラック・ボックスに入れておく、というように考えていた。こういった行動は一義的に論じることができるものではなく、類型を論じることができるだけだからである。なお、前掲拙著、p. 13～14も参照されよ。

土地所有者については、たとえば絶対地代論において、耕作を拒否して収益がゼロであるよりも、たとえ僅かな地代でも土地を貸し付ける方を選ぶという経済人の行動原理と土地所有者間の競争とを考慮するならば、絶対地代は無限にゼロに近づくというしかなく、その意味で絶対地代論は土地所有者の必ずしも経済人的とはいえない耕作拒否という行動を予定して説かれているわけである。そしてこの行動は、具体的には、たとえば耕作される作物に対する選別の問題から拒否されることもあろうし、たとえば美観といったその土地の他の使用価値との選択問題から拒否されることもあろうし、色々事情が考えられるが、それらはブラック・ボックスに入れられて、私的所有権は所有者以外の使用を禁止できるという点だけで原理を説く。そしてこの問題をあえて原理論の内部の問題として理解したければ、僅かな地代で自分の土地を荒らさせるよりは、耕作を拒否して地代ゼロに甘んじていれば、やがて次の等級の土地が耕作に入ってきて、自分の土地にも地代が生じるという期待が持てるという問題を、この問題が成立するような借地契約期間をどう仮定するか、耕作資本間の競争を

中間理論としての類型論（山口）

どう想定するかという問題とともに、とりあえず原理を説くための単純な仮定として設定しておけばよい。こう考えれば、耕作拒否は必ずしも経済人的ではないが、全く経済人的でないともいえない行動様式といえることになろう、というように考えていた。

労働者や土地所有者以外でも、たとえば信用関係における与信者・受信者について類似の問題を考えることができる。商品の売買取引は、商品の使用価値の種類によって、不特定多数の経済主体間のスポット取引的に行われることが多い場合もあれば、継続的な取引になって、その結果、特定の経済主体間の多少とも拘束的な相対取引になったりする。つまり、商品の売買取引は純粹に競争的な取引であったり、多少とも協調的な取引であったりする。したがって、商品の売買取引についても、そのうちのどれを、どのような仮定において、原理論で考察し、そのうちのどれをブラック・ボックスに入れるかという問題があるわけであるが、この売買取引が信用で行われることになると、さらに、たとえば夜逃げされるかもしれないというリスクを負いながら、経済人としての与信者が他人に信用を与えることができるための単純な仮定において、商業信用の原理を明らかにし、その上で、売買取引の形態や個々の資本家の行動原則に応じてさまざまな与信行動の様式が類型化されるというような問題があることになる。cf. 前掲拙著, p. 8～10。

なお、個々の資本家の行動原則ということでは、商品売買資本、商品生産資本、貨幣融通資本などの資本形式によって、あるいはそれぞれの形式のなかでも個々の資本家によって、ハイリスク・ハイリターン型の収益性志向を優先するものと、ローリスク・ローリターン型の安全性志向を優先するものという類型がありうる。これまでの原理論ではこの類型は積極的に問題にしておらず、したがってブラック・ボックスに入れられていたといってよいわけであるが、この二類型はどちらが純粹に経済人的であるとはいえない問題なので、いずれも原理論内部の類型として説いた方がよいのではないかと思われる。先にも述べたように、従来の原理論にはこの他にもこの種の類型の問題があると考えているが、この問題は別の機会に整理ないし構造化して示すことにしたい。

私は、経済人的な行動原理と必ずしもそうではない行動様式について、不明確ながらほぼ以上のように考えていたわけであるが、このような私の考え方にたいして、小幡が問題にしている「現実化」の問題は、私の問題意識からいうと、たとえば利潤率の増進という一元的な行動原理と、単純な仮定の下で利潤率のヨコの相違にもとづく資本の部門移動という行動を想定して、諸資本の社会的な均衡配分の機構を考察する原理論に対して、たとえば、各産業部門における固定資本の更新期間の相違の分散の状況とか、外部経済・不経済の存在のあり方とか、それぞれの資本家の償却政策、蓄積方針、資金調達の方の相違といった諸条件を導入することによって、部門選択による利潤率の増進行動様式の「現実化」を試みるという問題に相当する。そして私としては、上でも述べたように、これらの諸条件の中には、原理論の内部で（ブラック・ボックスに入れてではなく）論じることができる、というか論じべき問題と、ブラック・ボックスに入れておいて、原理論の外の間接理論で論ずべき問題が混在しているので、その仕訳をすべきであると考えているわけであるが、いずれにしろこの問題も別の機会にもう少し詳しく論じることにして、ここでは措くことにする。

さて、上の文章に続けて小幡は次のように議論を進める。

「利得追求という単純な行動原理に絞れば、そこから行動様式がつねに一義的に定まるといえるかどうか、この点が問題なのである。むろんこのような変形や様式化のうちには、利得追求とは異なる行動原理が何割か加わったために生じたものがあるかもしれない。しかしだからといって、そうした多様性のすべてが、利得追求とそれ以外の行動原理との合成に由来するとは簡単にいえないのではないか」（同上）。

先程から述べていることから明らかであろうが、私は「行動様式がつねに一義的に定まる」ような「単純な行動原理に絞」って、原理論ないし純粹資本主義論は展開されるべきであると考えているが、「利得追求という単純な行動原理に絞れば、そこから行動様式がつねに一義的に定まる」などとは考えていない。市場経済の構成員の行動を単純な経済人的行動原理に絞って考察する純

中間理論としての類型論（山口）

粹な場を設定するということは、その行動が外的諸条件の影響を受けると多様な行動様式を展開するということを排除しないと考えている。ただ、私にとっては、行動様式が多様になるのは原理論の世界の外の世界での話なのである。行動の原理論とその「変形や様式化」論の二段構えで考察しましょうというのはそういうことなのである。したがってまた、繰り返しになるが、この二段階目の「多様性」論をどうして合成論と考えてはいけないのかも依然として分からない。もっとも小幡が「多様性のすべてが…合成に由来するとは簡単にいえない」といっていることからすると、合成に由来するものの中にはあると考えているようにも思われるが、とにかく先に進もう。

小幡は続けて次のように言っている。

「もし利得追求以外の行動原理、たとえば相互扶助とか凭れ合いとか、名誉欲とか虚栄心とか、あるいは義理人情とか慈善や偽善とか、諸々あるのなら、それらはまず除外して考えてもちろんかまわない。それらはそもそも原理論の展開に不可欠な条件ではないのだから、そうしたものをブラック・ボックスに詰め込んで原理論を支えている隠れた条件としてその展開の内部にもち込む必要はないのである。ここでいうブラック・ボックスに入れられるべきものとは、それがないと実は原理論の展開が成り立たないのだが、その中身については一般的な説明が困難な条件だったはずである。いずれにせよ、ブラック・ボックスに入れられるものがはたして原理論の展開を支える行動原理とは異質な行動原理に限定されるのか、また異質な行動原理そのものが原理論の自立性を支える条件であるのか、こうした点において山口氏の規定にはなお不明確な点が残されているように思われるのである」(p. 40. r ~ 41. l)。

本節の冒頭で、ブラック・ボックスの中身についての小幡と私の理解の仕方の決定的相違点について述べたが、ここで小幡は改めて私にとっては理解に苦しむ中身論ないしその解釈論を述べている。すなわち、ブラック・ボックスに詰め込まれている中身は、「原理論の展開に不可欠な条件」、「原理論を支えている隠れた条件」であり、そのようなものとしてそれは原理論の「展開の内部にもち込」まれている、それは「それがないと実は原理論の展開が成り立たな

い」のだが、それについては「一般的な説明が困難」なものなので、ブラックボックスに入れられると考えられていた「はず」である、というのである。

「はず」であるという言い方からすると、この中身論は私の考え方を解釈したものなのであろうが、私はもちろん、ブラック・ボックスの中身は、「原理論の展開に不可欠な条件」、「原理論を支えている隠れた条件」で、そのようなものとして原理論の「展開の内部にもち込」まれているとは考えていない。原理論の展開には不要な条件として原理論からはずすというように述べている「はず」である。もちろん、ブラック・ボックスに入れられて原理論からは隠された諸条件が、現実の社会的再生産にとっては、その「展開に不可欠な条件」であり、「それがないと…その展開が成り立たない」ものであると私が考えているということは、改めていうまでもないであろう。したがって、最後の所で「異質な行動原理そのものが原理論の自立性を支える条件であるのか」が不明確であるとされても、私には何のことか分からない。小幡はひょっとすると、中間理論としての合成論も原理論だと考えていることから、私が原理論＝純粹資本主義論と現実的な社会的再生産論とを区別していることを没却しているのではなかろうか。

§ 4. ブラック・ボックスの埋め方

次いで小幡は、第3項「1.3 ブラック・ボックスの埋め方」において、私の説明に対する「根本的と思える疑問」なるものを提示する。小幡が疑問を提示している私の「説明」とは次のようなものである。すなわち、

「ブラック・ボックスを開けて、不問に付されていた部分を埋めることになると、不問に付されていた問題の性質によって、埋め方は一義的ではなく、いろいろな、ケースがありうることになる。むしろ一義的でないから、つまり原理がないから、ブラック・ボックスに入れられたわけであるが、それぞれの問題はそれらが発生する際の条件によって埋め方にいろいろなケースがありうるのであり、埋め方の相違によって、社会的生産の編成の仕方にそれに応じたい

ろいろなケースがありうることが示されることになる」（前掲書，p. 5）。

小幡は、この私の文章の最後の部分について、まず、これは「埋め方の相違があるとそれが社会的生産の編成の仕方に影響しそれを変化させるとも読める。おそらくこう読まれることは本意ではないかもしれないが、しかしこの点は山口氏の真意はひとまず別に十分考えておかななくてはならない論点であろう」（p.41.l）という。どうしてこう読むことが私の本意ないし真意と異なるかもしれないと思うのかよく分からないが、私としてはこう読んでもらって一向に構わない。問題はこう読むことの意味についての小幡の理解である。

小幡は続けて次のように言う。

「もともとブラック・ボックスという場合、それはいわばその内部と外部とが切断されているという認識がその根底をなすといつてよい。その内部がどういう構造になっていようと外部からみると、ある作用に対して特定の反応が生じる、そうした装置であれば、内部の機制は問わずともよいというわけである。その意味では、埋め方の相違によって社会的生産の編成の仕方に変化が生じるというのであれば、実は埋められるべき条件がブラック・ボックスではないということの意味していることになるわけである」（p. 41.l～r）。

ブラック・ボックスの「もともと」の意味がここに書かれているようなものであるとしたら、これは私が使っているブラック・ボックスという用語（小幡のいわゆる「修辞」）の意味とは異なる。「埋め方の相違によって社会的生産の編成の仕方に変化が生じる」ような諸条件をとりあえず別にしておく容器という意味で、私はブラック・ボックスという言葉を使っている。もっとも、小幡も続けて、「言葉尻をつかまえて…批判することがここでの目的ではない。ただ、私自身ぜひ考えてみたい問題がここに伏在している」といい、この点についての小幡の見解を次のように展開していく。

「原理論においてその展開を支えるいくつかの外的条件が必要であるということは無視できないであろう。…ここで外的というのは、…原理論を構成する個別主体の行動原理と反応して、特定の様式に変形されて内部化される、もとの条件という意味…である。ところでこうした外的条件に関していわゆる

宇野派においては、労働力商品という一点にそれを絞ることが、これまでひろくおこなわれてきたといつてよい。…それは、もろもろの外的条件をただ羅列するのではなく、何が資本主義を支える基本的な外的条件であるかを明確にし強調する便法として了解される範囲でなら、それはそれでかまわない。しかし、原理論を支える外的条件は、山口氏がこの論文の後半で列記しているようにそのほかにも種々考えられるのである。／問題はそれらがただ列記されるべきものなのか、という点にある」（同上．r）。

このあとの小幡の議論をみると、小幡のいいたいことは、「埋め方の相違によって、社会的生産の編成の仕方にそれに応じたいろいろなケースが」生じるような、原理論では不問に付してあった諸条件は、私がやっているように、「思い付くままに羅列」されるべきものではなく、経済主体の経済人的な行動に対する規定力の程度によって区別され、整理されるべきであるということのようである。私が私の論稿で、「思い付くままに羅列してみた」（前掲拙著，p. 19）といったのは、それが試論であるということをそういう言い方でいったもので、羅列にならざるをえないとか、羅列でいいというつもりでそういったのではなかったし、その論稿でも、最後の「小括」の部分（同上書，p. 21～22）である程度の整理（私なりのとりあえずの構造化の試み）はしているつもりであるが、それはともかく、小幡の整理をみてみよう。

小幡は次のようにいう。

- ①「[これらの諸条件の中には]〈社会的生産の編成の仕方〉に対して強く作用するものとそうでないものとがある…。たとえばその時代の流行などたしかに市場の取引の対象には強く影響しても、その取引の様式にはあまり影響を及ぼさないものもあれば、民族の歴史・文化・慣習など、その影響が多様で間接的であるために経済主体の行動に必ずしも一義的な結果をもたらさないものもあろう。これにたいして、生産力水準やそれに対応する労働編成などは、はるかに〈社会的生産の編成の仕方〉に強く作用するであろうし、貨幣制度がどのようなものになっているかは、市場構造に対して内部的な決定要因でさえあるといつてよい。こうした濃淡が実は外的条件にはあるのである。

中間理論としての類型論（山口）

むろんこうした外的条件は…その構造を一般的に説明できるような原理をそれ自身具えているわけではあるまい。そのかぎりではそれらは、やはり羅列されるほかないものかもしれない」（p. 42. l）。

- ②「原理論の機軸をなしている利得追求的な行動に与える影響という基準で捉えてゆくと、そこには一定の関係が潜んでいると考えることもできる。…資本主義経済の態様に規定的な要件もあればそうでないものもあるということになる。…それら〔原理論に隠された外的条件〕は与件として簡単に触れられればよいものではなく、むしろ原理論の展開自身、何が資本主義経済を支える与件であるのかを秩序立て、それらの関係を市場の観点から明らかにしてゆくことを主題とすべきなのである。…これからの原理論はこの〔ただ列記するのではなく重要な与件を摘出してゆくという〕点を意識的に追求すべきなのであり、資本主義経済を支える外的条件を一つに還元するのではなく、少なくとも複数取り上げてそれらの関係を明確に構造化して示すべきであろう。そして、その鍵をなすのは原理論を構成する構成主体の行動に対する規定力の程度を明らかにしてゆくことなのではないかと考えるのである。…〔しかし〕山口氏自身の基本的な姿勢は、こうした方向に向かっているとは言い難い」（p. 42. l～r）。

- ③「もし原理論から切り離してくどのような方法によって類型を構成すべきかという問題」を考えようとするのであれば、おそらくそれには一般的原理はないというほかに、中間理論といってもその点で理論たりえないであろう。山口氏はこの範囲では、やはりさきに述べたような利得追求原理とそれ以外の行動原理の二分法を基礎とし、原理論的な要因と段階論的な要因との分離可能性に立脚して、基本的に原理論といわゆる中間理論としての段階論とを別個の分析用具として並行適用すべきだと考えているわけである。こうしてこの論文はこれ以降、原理論の具体的展開のなかで山口氏がブラック・ボックスに入るべきだと考える問題群を基本的に列挙してゆくことになるわけであるが、このような列挙では本来すまないことになる。これらを構造化する作業はむろんそれに関心をもつものの責務となるのであり、以下山口氏の議

論をさらに追いながら、外的条件はいかに処理されるべきか、私なりにできるかぎり考えてみることにしたい」(p. 42. l)。

①では、「外的条件」には社会的生産の編成の仕方に対して「強く作用するものとそうでないもの」といった「濃淡」があるが、これらには「その構造を一般的に説明できるような原理」があるとはいえないという意味では、「羅列されるほかないのかもしれない」という。先にも述べたように、私は別に羅列されるしかないといっているのではなく、試論の段階なのでとりあえず羅列してみようと考えたわけであるが、小幡は、ここでは、「社会的生産の編成の仕方」にたいする影響の強弱、濃淡という基準で捉えようとするならば、羅列にならざるをえないかもしれないという。いいかえれば、私が羅列しているのは、外的条件についてこういう捉え方をしていることによるというのであろう。

②それではどういう捉え方の場合には羅列にならないかが、次の問題である。それを小幡は、「原理論の機軸をなしている利得追求的な行動に与える影響という基準」、「原理論を構成する構成主体の行動に対する規定力の程度」という基準によって問題を捉えると、外的条件は構造化して示されざるをえないことになり、しかも「これからの原理論はこの点を意識的に追求すべき」というのである。外的条件を構造化して示すことには別に異論はないが、これまで繰り返し述べたように、外的条件との合成は、原理論内部の問題としてではなく、原理論の外で、中間理論としてやりたいというのが私の考えである。

したがって、最後で小幡がいつているように、私の基本的姿勢が小幡のような方向に向かっていないことはいうまでもない。ただこの場合、先の引用では省略したが、小幡が、私の「従来の多くの原理論において不問に付されてきた問題の中には、ブラック・ボックスの中に入れないで、原理論の問題として積極的に展開できる、あるいはした方がよい、と考えられるものもある」(前掲拙著, P. 6) という文章を引用して、ここには不明確ながら外的条件を「原理論の展開に取り込むべきだという」「含意を読みとれなくはない」(P. 42. r) といっているところがあるので、その点にコメントしておく。これまでに述べたことから明らかであると思うが、私がそこでいったことは、当然経済人的行

中間理論としての類型論（山口）

動として原理論において論じられるべきと思われるものであるにもかかわらず、そうっていないものがあるように思われたので、それについていったものである。一部の相対取引（cf. 前掲拙著，p. 8～9）とか年利潤率以外の基準による利潤率・利潤量の最大化（cf. 同上書，p. 10～11）とか不確定性に対するリスク・ヘッジとしての保険（cf. 同上書，p. 13）とかなどがそうであるが、その他にも、たとえば、先に述べた収益志向型と安全志向型といった資本家のタイプの問題などもそうである。経済人的行動に「強い影響を与える[外的]条件」について「原理論の問題として積極的に展開できる」といったわけではない。

③ここでいわれていることを2点に分けてコメントしよう。

まず、小幡は、原理論から切り離して類型論を構成するならば、それには「一般的な原理はない」ので、それは「理論たりえない」という。しかし、私は中間理論を原理論の限界を補完するものとして位置づけることによって、中間理論と原理論の理論的関連を明らかにしたつもりであるが、そのことによって中間理論を原理論から切り離しているとは思っていない。それに対して、小幡にとっては、一般的な原理がなければ理論ではないのであり、一般的な原理があれば原理論の内部で説けるはずだということになっていて、そもそも類型論は理論ではない、あるいは、原理論以外に中間理論などという理論はない、ということになるのであろう。一般的原理がなく、したがって原理論内部の問題としては論じることが出来ないような外的条件はいくらかもあるであろうが、それらを論じる領域の存在を小幡は認めないのであろうか。仮に認めるとするならば、それらの外的諸条件が羅列ではなく構造化されて記述された場合には、その領域は小幡にとっては理論とはいえるのか、それともやはりいえないものなのか。これが次の問題であるが、これは次稿で検討することになる。

第2点は、原理論と中間理論を分離して、別個の分析用具として「並行適用」する場合には、外的条件は列挙されざるをえないことになるといっている点である。先にもいったように、私も外的諸条件を構造化して示す必要があることには異論はないが、構造化すると原理論の問題になる、あるいは原理論の内部

でなければ構造化することが出来ない、という外的条件論は私には全く理解できない。外的諸条件は、現実の社会的再生産にとってのそれらの役割の構造を基準にして構造化して示されうるであろうが、「原理論的な要因」ではない外的諸条件は、原理論ないし純粋資本主義の「自立性」にとっては、その成立条件として何の役割も果たしていない。それが外的ということの意味である。だから原理論ではブラック・ボックスに入れられるのであり、その構造化は原理論の外部の問題として、二段構えで説く重層的展開にならざるをえないのである。そして、これらの外的条件の構造化が、原理論ないし純粋資本主義の構造との対応で、すなわち原理論のどこで、何がブラック・ボックスに入れられたかという構造との関連で、行われるならば、こうして構成される中間理論は、原理論の外部の理論ではあるが、原理論から「切り離」されているわけではないといってよいのである。

このあと小幡論文は第2節「〈ブラック・ボックス〉の多義性」に進む。小幡の考えている「構造化」と同じかどうかは別にして、「構造化」そのものにはもちろん私も関心を持っているので、私も稿を改めて、次稿「外的諸条件の構造と諸類型の構造」において、小幡の「構造化」を検討しながら、私の「構造化」の考え方を述べてみることにしたい。